記事タイトル「**DXとIT化の違いは？企業がDXの波に乗り遅れないために**」

**●リード文**

2019年以降、新型コロナウイルスの世界的な流行で、世の中のほぼすべてと言える分野にデジタル化の波が押し寄せました。

そのような社会の中で、よく耳にするようになったのが、「DX」という言葉です。

テレビや新聞、雑誌やネットの記事で目にすることの増えたこの言葉ですが、これまで使われてきた「IT化」との違いを、あなたは理解できていますか。

DXについては、経済産業省が2018年にDX推進のための対応策などをまとめたガイドライン（https://www.meti.go.jp/press/2018/12/20181212004/20181212004.html）を公表しています。

国だけではなく、社会全体がDXへ向けて動いている時代です。

ですが、DXとIT化の違いを理解していない人が多いのも事実。

この記事では、DXとIT化の違いを説明した上で、企業が今後生き残るために何をしていくべきかをご紹介します。

**●見だし「DXとIT化の違いは？」**

DXとIT化の意味の違いは、「デジタル化」によって実現する目的の違いにあります。

DXは、情報技術や通信技術を駆使して、これまでにあったものを覆すような抜本的な変化を生み出すことを目的とします。

一方IT化は、技術を駆使して、業務効率化や生産性の向上といった局所的な変化を狙います。

これだけでは２つの言葉の違いを理解するのは難しいので、もう少しそれぞれの言葉について詳しく見ていきましょう。

**●見だし「IT化とは」**

ITとは、英語のInformation Technologyの略語です。

「情報技術」と訳され、インターネットをはじめとした通信やコンピューターを駆使する技術全般のことを指します。

ITの登場で、これまで実物での取引が必要だったモノや人、金が、オンラインやデジタル上で、「情報」としてやりとりできるようになりました。

登場後、さらにITが進歩したことで、これまでオンラインやデジタル以外の方法で行われていた作業や業務、取引（非デジタル）が、実際にオンラインやデジタル上での作業に置き換えられるようになりました。

この、「非デジタル→デジタル」の流れを、IT化と言います。

ITは、企業経営にも影響を与えました。

これまで人の手で行っていた業務を自動化したり、システム化したりすることで、業務効率化や生産性の向上を進めることができるようになりました。

「IT化」というのは、このような一つの企業や業界という狭い範囲の中で、業務の効率化や生産性の向上といった局所的な変化を目的とした「デジタル化」のことを言います。

**●見だし「DXとは」**

DXとは、Digital Transformationの略語です。

まだ一般的な訳語はできていませんが、直訳すると「デジタルによる変容」です。

先に紹介した経産省のガイドラインでは、DXについて次のように定義しています。

企業がビジネス環境の激しい変化に対応し、データとデジタル技術を活用して、顧客や社会のニーズを基に、製品やサービス、ビジネスモデルを変革するとともに、業務そのものや、組織、プロセス、企業文化・風土を変革し、競争上の優位性を確立すること。

出典：経済産業省「デジタルトランスフォーメーションを推進するためのガイドライン」

簡単にまとめると、ITを活用して、「製品やサービス、ビジネスモデルを変革」したり、「組織、プロセス、企業文化・風土を変革」したりすることがDXです。

IT化の目的は、企業や業界の業務効率化や生産性向上という比較的狭い範囲で、局所的な目的であったのに対し、

DXは製品やビジネスモデル、組織といった、より広く、根本的な部分を変えることを目的とします。

また、「データとデジタル技術を活用して」とあるように、DXのためにITが手段として考えられていることにも注目しましょう。

まずITという土台があって、その上にDXがある。

「非デジタル→デジタル」というIT化を経た上で、デジタルによって企業や社会に起きる抜本的な変容がDX。

このようにイメージすると分かりやすいかもしれません。

**●見だし「時代はDX化。企業が乗り遅れないためには？」**

2020年から21年にかけて、行政機関の「脱はんこ」が盛んにテレビで取り上げられました。

その際、「DX」としてこの動きが取り上げられることもありましたが、それは正確ではありません。

「行政文書にはんこがいらない」という意味での「脱はんこ」は、あくまでも業務効率化を目的とした「IT化」です。

脱はんこによって、

・市民が市役所に行かず

・職員も市役所に行かず

・それでもこれまでと変わらず行政手続きができる

といったように、これまでの行政手続きの根本を覆すような変容を起こして初めて、「DX

」と言えるわけです。

この話を、企業に置き換えて考えてみましょう。

「IT化」と「DX」の意味を混同し、他社がDXを進める中、自社がIT化にとどまっていたらどうなるか。

他社がITを活用し、人々の生活を変えるような画期的なサービスを構想する中、自社が業務効率化のための社内システム整備で満足していたらどうなるか。

市場での競争力を失うばかりか、DXによって訪れるビジネスチャンスに乗り遅れることになりかねません。

今、企業に求められていることは、IT化を進めるのはもちろん、その先のDXも見据えた経営戦略や事業プランを考えることです。

そのためには、ITに関する専門的な知識と、経営や業界の見通しに関する深い見識を持つ人材が不可欠です。

企業には、社会に訪れるDXの波に乗り遅れないために、２つの選択肢があります。

一つは、ITの知識が豊富で、DXにも対応できる見識を持つ人材を雇い入れること。

もう一つは、ITコンサルタントのような外部の力を借り、企業として力を身に着けていくことです。

すでに変容が始まっている社会の中で、何も選択しないことはできません。

いま、あなたにできることはなにかを考えてみましょう。